

目 次

はじめに

序 章 現代日本における「非核・平和」

- 1 非核平和都市宣言に見る日本の「非核」と「脱原発」 3
- 2 「原子力の平和利用」は可能か? 9
　　| 「文明の暴力」としての原子力

第一章 日本の社会主義——「非戦・平和」からの出発

- 1 日本における体制変革の試み 19
- 2 社会民主党の四大原理 20
　　| 社会主義、民主主義、平和主義、国際主義
- 3 幸徳秋水の非戦とアメリカ体験 25
- 4 サンフランシスコ大地震の「灾害ユートピア」 33
　　| つかのまの社会主義

第二章 ロシア革命、関東大震災と社会主義

- | | |
|----------------------------|----|
| 1 第一次共産党——ロシア革命に触発された社会主義 | 43 |
| 2 一九二二年九月の「日本共産党綱領」 | 48 |
| 3 関東大震災における「災害ユートピア」の兆候 | 53 |
| 4 「エリート・パニック」としての朝鮮人・中国人虐殺 | 58 |
| 5 孤立した社会主義と第一次共産党の解党 | 61 |

第三章 近代化のための社会主義・共産主義・原子力

- | | |
|------------------------------|----|
| 1 第二次共産党——山川イズムから福本イズムへ | 73 |
| 2 近代化の論理と社会主義の論理 | 75 |
| ——「三二年テーマ」の夢見た近代 | |
| 3 H·G·ウェルズにおけるSFとしての原子力と社会主義 | 85 |
| 4 近代化のもう一つの道としての「原子的家庭」 | 91 |

第四章 占領下日本の原爆・原子力

- | | |
|---------------------|-----|
| 1 日本への原爆投下は不可避であつたか | 115 |
|---------------------|-----|

　　——冷戦の起源としての広島・長崎

- | | |
|-------------------|-----|
| 2 日本国憲法の制定と社会主義政党 | 122 |
|-------------------|-----|

　　——日本社会党と第三次共産党の出発

3 「悔恨共同体」か「無念共同体」か
——占領下日本の「原子力」言説 135

第五章 原子力にあこがれた社会主義——武谷三男の場合 145

- 1 米国の核開発に協力した日本の科学者 147
- 2 「原子力時代」を根拠づけた武谷三男の社会主義論 154
- 3 サンフランシスコ講和条約と日米安保体制 168
- 4 朝鮮戦争期の日本の科学者と武谷三男 172

第六章 「アトムズ・フォー・ピース」の日本的受容 177

- 1 ビキニ被爆がもたらした「原水爆反対、
原子力は平和のために」 179
- 2 原発導入国策化における日本社会党の役割 184
- 3 日本共産党の「原爆反対、原発歓迎」と
武谷三男の「脱原発」 192
- 4 「ビキニからフクシマへ」の原水禁運動と脱原発運動 208

第七章 平野義太郎と日本共産党の「平和利用」論 213

- 1 講座派の論客から「大アジア主義」を経て
日本平和委員会会長に 215

- 2 共産党の六一年綱領と「原子力の平和利用」 224
3 原水禁運動を分裂させた共産党の「社会主義の防衛的核」
4 脱原発運動に反対した共産党の「平和利用」の論理 233

第八章 日本社会党と有澤廣巳の「原子力と社会主義」

- 1 松前重義と社会党の「原爆反対、原発推進」 241
2 原子力委員会「労働代表」有澤廣巳の場合 246
3 日本経済自立のために——エネルギー転換と原子力委員就任
4 原子力の経済性と安全性のはざまで 253

終 章 社会主義の崩壊と脱原発運動

- 1 チエルノブイリがもたらした社会主義の崩壊
2 日本の原発大国化と反原発・脱原発運動
3 日本の社会主義と平和主義の遺産 266
——「唯一の被爆国」を超えて 262
261